

女おんなに化ばけた勇者ゆうしやポイヤンベ

わたしは勇者ポイヤンベ。

トミサンペチ川のほとりのシヌタプカという村で、一人しずかに暮らしています。

ある日、こんな話が聞こえてきました。

「八つの村の人々が集まって、ポイヤンベを殺そうとしているぞ」

おどろいたわたしは、風を巻きおこして、空に跳びあがり、  
二つの海、三つの海をこえて、彼方の国へと飛んでいきました。

彼方の国には村があり、村のまんなかには、大きな家がありました。

わたしは、家にしのびより、

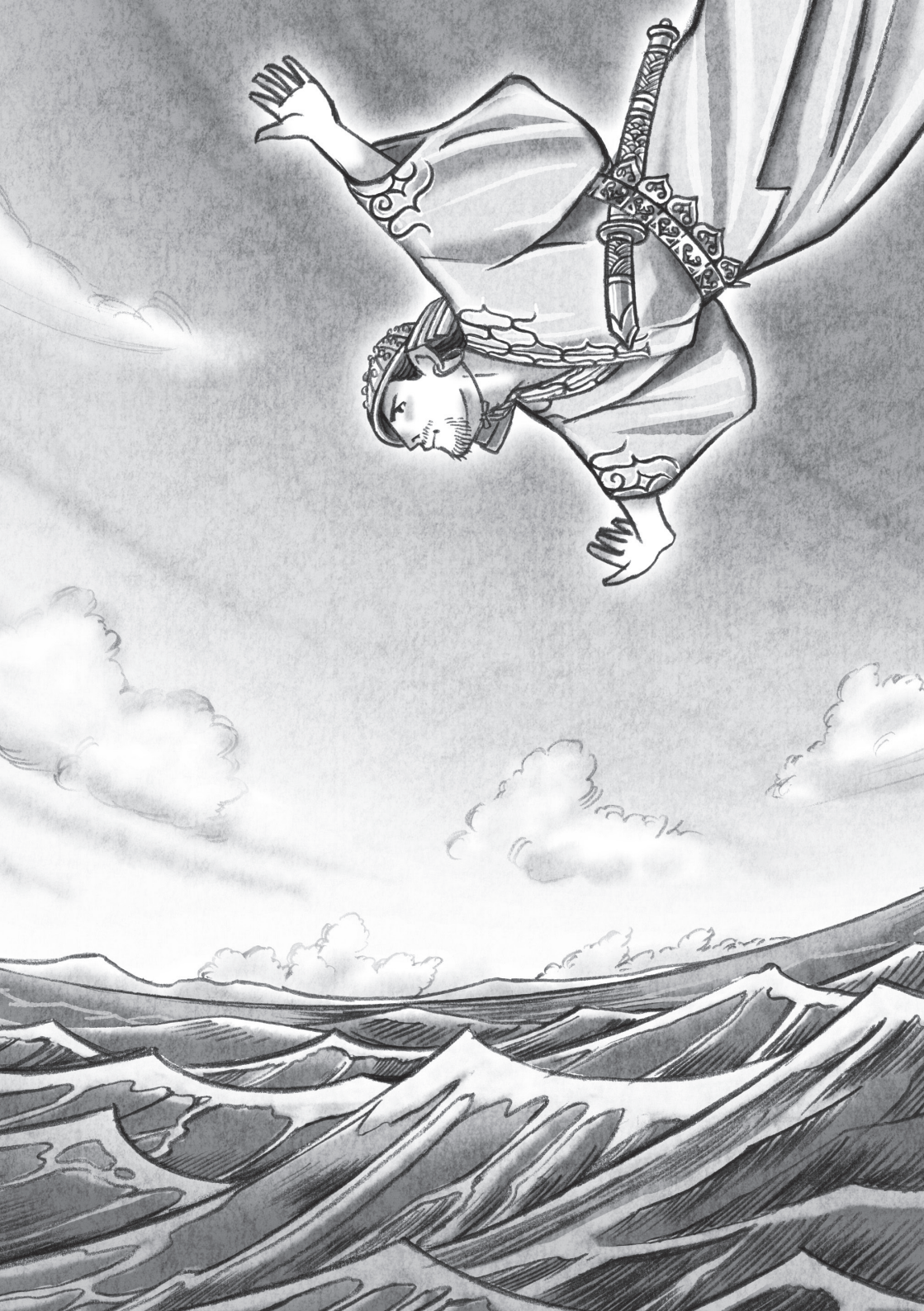
神窓のすだれのあいだから、そうつと、なかをのぞいてみたのです。

すると、なかでは、八つの村の男たちが集まって、酒を酌みかわしていました。

「よおし、明日はこんなふうには、ポイヤンベを、たたき切つてやるぞ」

「そうだ、そうだ。バツサリと切つてやろうじゃないか」

男たちは、ぐいぐい酒を飲み、人を切る身ぶりをしては大騒ぎをしています。



わたしは、澄んだ風になつて、すうつと家のなかにはいりこむと、  
玄関の隅つこに、そつと隠れていました。

すると、そこへ、チュプカから来た女が、金の器を手にはいつてきました。

わたしはすかさず、女の首を切りつけました。

声をあげるまもなく倒れた女から着物をはぎとると、わたしはそれを羽織り、  
金の兜や刀をなかに隠しました。

そして、女が持つていた金の器で顔を隠すようにして、  
男たちの宴のただなかへと、はいつていつたのです。

「やあやあ、チュプカのお方、よくいらつしやいました。まずは、一杯どうぞ」  
男たちは、うれしそうに、わたしに飲みさしの盃を差しだします。

わたしは、飲むふりをして、お酒をみんな首の方へと流して捨ててしまいました。  
そして、盃に顔を隠しながら、男たちへと、もどしたのです。

男たちは酔いがまわり、ますますきげんがよくなつて、踊りだしました。

わたしも、いつしよになつて踊ると、男たちはとてもよろこんで、  
ますますはげしく踊ります。



「やあやあ、チュプカのお方もおよろこびだぞ！」

「明日は、かならずポイヤンベの首を取るぞ！」

「そうだ、そうだ、バツサリとたたき切つてやろう！」

男たちが口々にそういうと、アトウイヤから来た女がこういいました。

「では、わたくしが占つてみましょう」

女は、棒をとりだすと、占いを始めました。

そして、青ざめて、こういったのです。

「この家にいる者、いまここで宴をともししている者は、

ただの一人も生き残れない、と占いにでました」

男たちは、それを聞いて大笑い。

「そんなバカな」

「おれたちが束になつてかかるんだ、ひとたまりもないさ」

「やりそこなうものか」

そしてまた、ゆかいに踊りだしました。

わたしも、いつしよに踊ります。

すると、いきなり、場がしんと静まりかえりました。

見ると、みんながわたしを見て、凍りついています。



気がつくと、わたしの胸の前がはだけて

金の兜と金の刀が、きらきらときらめいています。

わたしは、きつと着物を脱ぎすけると、刀を帯に差し、兜のあごひもを結び、酒のはいったシントコを高々とかかげて、一気に飲みほしました。

そして、空になつたシントコを、宴の主人にエイッとばかりに投げつけたのです。

シントコはしたたかに主人を打ち、主人は命を失つて、魂が去つてゆく音が、あたりに鳴りひびきました。

それからわたしは、切つて切つて切りまくり、気がつくと、家のなかには、生きている者は一人もいませんでした。

わたしはふたたび風を巻きおこして、空に跳びあがり、疾風のように、トミサンペチに帰っていきましました。

そして、それまでのように、一人しずかに暮らしたのです。